

第44回日本小児皮膚科学会 学術大会を開催して

(2021年1月9・10日 Web開催)

森脇 真一

大阪医科大学皮膚科学教室教授

このたび、2021年1月9・10日の2日間、第44回日本小児皮膚科学会学術大会を大阪医科大学皮膚科学教室(会頭:森脇真一)、同小児科学教室(副会頭:芦田 明教授)で主催させていただきました。

本学術大会は当初、2020年7月11・12日の両日、大阪北部の千里ライフサイエンスセンターにて開催予定でしたが、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の世界的な蔓延のため延期し、会場も大阪国際交流センター(大阪市内)に変更して開催しようとしたしました。しかし、COVID-19感染症の終結には至らず、参加者の皆様の安全を最優先と考え熟慮を重ねた結果、完全Web開催(会期は延期後の日程と同日)にさせていただくことといたしました(図1)。大会期間中はコンベンション会社(大阪梅田)の会議

室から全データを配信するというわれわれにとって初めての開催形式ということで、不慣れもあり不安な2日間でしたが、幸いなことに大きなトラブルなく無事に2日間の完全Web開催を終えることができました(図2,3)。参加者は例年よりは若干少なかったですが、コロナ禍、また当日は厳しい寒波の中、正月明けの忙しい時期、そして東京では緊急事態宣言の中で計446名のご出席をいただきました。

今回の学術大会テーマは、「おおきくなあれ!～難病のこども、家族とともに～」(図4)とし、①日々進歩する小児皮膚科学に関する正しい情報を幅広く先生方にご提供し、最新の知見を学んでいただくという例年の学会のスタンスに加え、②小児難病の最新の話題、難病をもつ親の思いを医師、医療



図1 プログラム・抄録集

表紙は鳥が幸せを運んでくるイメージにしました。



図2 会頭挨拶

広い部屋の一角、1台のPCを前にしたひとりでの会頭挨拶も寂しい限りでした。



図3 専門スタッフによるデータ配信

従事者、各関係者にご提供するためのシンポジウム、教育講演をプログラムに多く組み入れる、の2つを大きな大会コンセプトといたしました。

特別講演では神戸大学の青井貴之教授に「iPS細胞を用いる医学の展開」というテーマで難病治療研究の現状について、また血管腫・血管奇形に対するIVR治療の世界的権威である大阪医科大学放射線診断学の大須賀慶悟教授には最新の知見を提供していただきました。

また大阪医科大学名誉教授の玉井浩先生(小児科)をお招きして「ダウン症候群の総合診療」をテーマに患児の診療のみならず、彼らを取り巻く環境整備、支援の重要性というメッセージを含めてご講演いただきました。

さらに小児皮膚難病関連の3つのシンポジウム(「小児皮膚難病に挑む」「これからの小児皮膚難病を考える」「小児の非遺伝性難治性皮膚疾患どう治

す」)、5つの教育講演(「小児膠原病・リウマチ性疾患」「小児のアザ」「遺伝カウンセリング」「医療安全」「小児血管炎」)に加え、今回は私が専門としている小児難病、色素性乾皮症とコケイン症候群の患者家族会の代表の方々にもご参加いただき、ファミリーセッションということで、患者家族会の歴史、活動状況、難病をもつ親としての子どもへの想いや医療・行政への要望などをお聞かせいただきました。

一般演題数はほぼ例年並みの57演題をご登録いただきました。共催セミナーは、各社「小児に適應がない」という理由でかなり交渉が難航しましたが、なんとか8社からご協力を得ることができました。

日本小児皮膚科学会の歴史は古く、1977年に山本一哉先生(旧・国立小児病院皮膚科)が設立され、第1回の学術大会が安田利顕先生を会頭に笹川記念会館(東京)にて開催されました。その後、年1回の学術大会は関東地区での開催が多く、これまで関西での開催は第23回大会(1999年、和歌山)のみでした。今回、最終的には完全Web開催となり、「21年ぶり2度目の関西開催」、「初めての大阪大会」が叶わず残念ではありましたが、ご視聴いただいた皆様には皮膚難病研究を含めた小児皮膚科学の最先端の潮流を肌で感じていただけたものと思っています。



図4 本学会 HP のホームページ
皮膚難病がいつかは完治する時代が来ることを願ってテーマ、画像を考えました。